ねがい ひろがる 教育実践

神戸大学
川地亜弥子

かわじ　あやこ／研究テーマはわかる・楽しい・感動のある授業づくり、安心できる集団づくりについて。編著に『実践、楽しんでますか？―発達保障からみた障害児者のライフステージ』（クリエイツかもがわ）など。

第３回　要求を育てる

今回は、学校に入る前、幼児期の実践について考えます。テーマは、「子どもの要求を育てる」です。

子どもがうまくことばでやりとりできない時、どうしたらいいでしょう…？そうです、その子のまなざしや表情、動きから、想像していくのです。自分の関わりを、周りの環境を、その子がどう感じているのか……私たちは悩みます。ダメな行動が減ったらマル、という単純な世界ではなく、その子にとってどうなのだろう、と想像するからこそ、悩みます。

特別支援学校幼稚部の小川真也さんの実践は、子どもの内面を想像する、その手がかりにたくさん気づかせてくれます。

この子は何が好きなのだろう

小川さんが子どもと出会った時に大事にすることは、ずばり「この子は何が好きなのだろう？」です。幼児期の障害がある子どもたちと向き合っていると、ことばが通じにくい、何をしているかわからない…という気持ちになって、「困った行動」を減らさなくては、とやっきになってしまうこともあります。でも、小川さんはまずその子の好きなものを考えます。「問題行動を減らす」ことではなく、その子の思いに注目するのです。

もう一つは、「どうすれば私に気づいてくれるだろう」です。「子どもは大人に気づいてあたりまえ」ではなく、その子にとって、自分が「あれ、この人…」と気づいてもらえるような人であることを大事にしています。強い刺激（光や音、怒鳴り声、激しい行動も含めて）で無理にその子に気づかせるのではなく、その子の好きなことを想像し、その子の世界を一緒に見たり、その子と一緒に動いたりすることから始めて、その子の好きな活動に欠かせない存在として自分がいられないだろうか、そこで私に気づいてくれないだろうか、と考えるのです。

期待を育てる関わり

3歳のりょうたくん。知的障害をともなう自閉症という診断を受けていました。「りょうたくん」と呼びかけても振り向きませんが、おんぶが大好き。大人が座っていると、背中にくっついて、何度もおんぶを求めていました。

ある日、小川さんは自分におんぶされているりょうたくんの晴れない表情を見て、「おんぶだけを求めているのだろうか」、「りょうたくんの本当のねがいは何だろうか」と考えるようになりました。そこで、おんぶにいろんな変化をもたせました。歌を歌う、走ったり止まったり速さを変えたり…。

「楽しそう！」と思ったあなた。そうなんです、りょうたくんにとって、好きなおんぶがもっと楽しくなる方法でした。でも、小川さんは「楽しそう」という勘だけでこうしたのではありません。

りょうたくんは、今、他者との関わり、外界との関わりへと広がっていく時期なのではないか、と仮説を立てていたのです。もしそうだとしたら、りょうたくん自身が、期待をもって外に働きかけるようなとりくみで、りょうたくんが楽しめるものがいいのではないか…。

そこで小川さんは、「繰り返しのある関わり」のなかで、りょうたくんが「～の次には○○がくる」と期待してくれるようになる働きかけを大事にしようと考えました。そして、そのことが大人の関わりを期待し、「次も～してほしい」という要求が生まれることにつながり、りょうたくんが大人と結びつく力になるのではないか、と考えました。どんな方法がいいだろう…。

考えた末に小川さんは、毎日のように園で歌われていた「線路は続くよどこまでも♪」を歩いたり走ったりしながら歌って、１つのフレーズの終わりで必ず「ぽっぽー」と語りかけながら立ち止まって、背中のりょうたくんを上下に動かすことをしてみました。

くりかえしているうちに、りょうたくんが、「ぽっぽー」の時に自分でも「ぽっぽー」と声を出すようになりました。小川さんの歌を聴いて、「ぽっぽー」がくるのを期待しているのです！

まずはその子が好きなことから

自閉症の子どもたちと遊ぶ時に、まず自分のことを好きになってもらってから遊ぶのではなく、むしろ「好きな遊び、この子にとって楽しいことをする人」として小川さんがいたことは、とても大事なことのように思います。

大人が正面から関わろうとするとさっとかわしていたりょうたくんに、まず人が前に出てくる関わりをしていたのでは、おそらくうまくいかなかったのではないかと思います。りょうたくんと何度